

第2学年 生活科の実践

1 単元名 「うごく うごく わたしのおもちゃ」(全14時間)

2 単元目標

身近にあるものを使って動くおもちゃをつくり、友達と競争したり、工夫を教え合ったりしながら、自分なりに改良することを通して、動くおもちゃの面白さや不思議さを実感するとともに、遊び方を工夫しながら、みんなで遊びを楽しむ。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

【「みんなで」を意識したクラスづくり】

集中して学習できるよう、聴くだけでなく視覚的にも捉えられるように画用紙や模造紙に大きく書いたり、実物や具体物で提示したりするよう心がけた。

休み時間は、一人で本を読んだり、少人数で折り紙やお絵描きを楽しんだりしている児童もいる。そこで、クラス全体で取り組めることを学習に多く取り入れるように心がけ、みんなで何かをした後の達成感を味わわせるようにしてきた。互いに認め合い励まし合えるクラスの雰囲気づくりに力を入れた。

【聴く・話す】

「ひびき合う」ためには、まずは自分の考えを持つことから始まり、さらに「自分と同じ」「自分とは違う」という思いをもって話を聴けなくてはいけない。また、「聴く」だけでなく、話し合いに参加して、互いの考えや思いをぶつけ合うことも必要である。そのため、「聴く」「話す」の力をしっかり身につけるということがスタートになると考えた。

朝の会では、テーマを決めて簡単なスピーチ活動を行ってきた。また、質問する人が偏らないよう順番を決め、対話する時間を設けてきた。短いやりとりではあるが、大きな声で話したり、全体の前でスムーズに話したりすることができ、話すことに慣れると考えた。

国語の物語文の学習では、どの子も初発の感想を持てるようになってきた。同じ感想でも「〇〇さんと同じで～」と自分の口でも発言するように促したり、「友達と同じかな、違うかな」と聴くように声をかけたり、「聴く」「話す」の名人級をめざすよう指導を続けてきた。

また、全体での話し合いの前には、一度ノートに書かせる、順番に指名する、ペアで考えを交流させるなど、自信をもって発言できるような工夫をしてきた。

【関わり合い・ひびき合い】

生活科の「1年生をむかえよう」では、自分の成長に気づきながら、アサガオの種をプレゼントしたり、学校案内を計画的に行ったりして、1年生を思いやって関わってきた。また、「まちたんけん」では、少人数で探検したり、分かったことをまとめたり紹介し合ったりする活動で、グループの友達と多くの関わりを持ってきた。発表会では、他のグループの発表を聴いて、ひびき合う姿とまではいかないが、「なるほど」と感心している姿を見ることができた。

「聴く」「話す」のルールをしっかりと身につければ、教師主導型ではない、話し合いも少しずつできるようになってくる。ひびき合いながら、さらに、話し合いに深まりを持たせるために、事前に児童の考えや思いを把握しておき、「違う」意見を大切に扱っていきたい。

ひびき合う子どもたちをめざすためには、児童に「切実な問題」をどう出会わせていくのかが大きく関わってくる。そのため、じっくり時間をかけて話し合い、児童の考えや思いを大切に扱い、先を見通せるような学習計画を立てるよう心がけている。

4 単元と指導について

①単元について

学習指導要領の内容(6)の解説では、「草花、木の実、石、水、風などの身近にある自然や、紙、空き箱、ストロー、割りばし、輪ゴム、磁石などの身近にあるものを使い、遊び自体を工夫したり、遊びに使うものを工夫して作ったりすることが主な活動であり、その過程を通して遊びの面白さや自然の不思議さに気づくとともに、みんなで遊びを楽しむことができるようにする」と述べられている。それをふまえて、本単元では、特に身近にある物を使って、動くおもちゃを作り、みんなと遊びを「楽しむ」ことをねらいとした。その中で、友達と競争したり、教え合ったりしながら、自分のおもちゃを改良し、さらにパワーアップしたおもちゃで遊びを楽しみ、動くおもちゃの面白さや不思議さに気づくことができると思う。また、作って遊んで工夫して、ということを繰り返すことで、気づきの質も高まっていく。このことが、第3学年以降の理科の学習に生きていくと考える。

友達と遊ぶ活動の中で、おもちゃに合わせた遊びの場を自分たちで考えたり、ルール必要性に気づき約束ごとを考えたりすることができるであろう。また、一人で遊ぶより、みんなで遊ぶことの楽しさを十分味わうことで、友達と関わり合うことのよさに気づくことも期待している。

②指導について

《切実な問題》

遠足で行った中平畑公園の自然館で教わった「紙とんぼ」を自分の折り紙で工夫して作って遊んでいる児童がいた。そのくるくると回って下に落ちていく「紙とんぼ」を紹介し、さらに教師の作った動くおもちゃを紹介することで単元のスタートを切りたい。十分な数のおもちゃを用意し、遊ぶ時間を多くとることで、「自分の」おもちゃを作りたいという興味を持ち、おもちゃの動く仕組みや工夫にも関心が集まるはずである。

自分のおもちゃを作り、遊び、工夫し、また遊んで楽しむ中で、ルールを作っていきたい、みんなで遊びたいという「切実な問題」が出てくると考える。

《ひびき合い》

友達の考えを聴いて、「なるほど」と共感したり、「自分とは違う考え」に気づいたり、「どうしてそう思ったのか」と疑問に思ったりすることを通して、自分の考えをより確かなものにしたり、より深めたり、あるいは変えたりすることがひびき合う姿と考える。さらに、本単元では、おもちゃをより高く跳ばす、より速く走らす工夫を教え合ったり、折り紙によるきれいな飾り付けやマジックで色付けしたおもちゃを見てまねをしたりすることも1つのひびき合う姿と考える。

本時は、おもちゃ大会を開くために、どうすればよいかをみんなで話し合う場面である。互いの意見を聴き合い、いろいろな準備が必要であることに気づくことをひびき合う姿としたい。そのために、話し合いのルールを確認する。ペア交流を経て、全体で交流していく。また、「違う」考えを大切にするために、事前にそれぞれの考えを座席表で把握したものを生かし、相互指名に加えて意図的指名を行っていくようにしたい。

《子どもの見とり》

児童の発言や言動、振り返りカードから分かること等、毎回座席表にできる限りメモすることで、児童の成長を見とっていききたい。特に、振り返りカードでは、「やったこと・気づいたこと・思ったこと」と「次の時間にやりたいこと」の2項目を設けている。児童が感じ取ったことがらに共感したり、時には問いかけたりして、児童の考えや思いをもっと引き出せるよう、朱書きで働きかけをしていくようにする。また、おもちゃについての新しい気づきや友達のがんばりに気づいたことは、次時のはじめに紹介するよう心がけたい。

児童と同じ目線に立ち、この単元と一緒に楽しみながら期待感を持って、活動を進めていくようにしたい。

単元
目標

身近にあるものを使って動くおもちゃをつくり、友達と競争したり、工夫を教え合ったりしながら、自分なりに改良することを通して、動くおもちゃのおもしろさや不思議さを実感するとともに、遊び方を工夫しながら、みんなで遊びを楽しむ。

うごく おもちゃで遊ぼう②

- ・楽しかった。また遊びたい
- ・競争して勝った！うれしかった
- ・負けた！くやしかったよ
- ・上手にやるコツを友達に教わった
- ・自分のおもちゃを作りたい
- ・作って、紹介したい

全員が楽しく遊べるよう、多くのおもちゃを用意しておく。

作りたい気持ちを受け止める。材料は自分でお手本をよく見て、そろえさせる。

自分で作って遊ぼう④

パッチン ガエル	とことこ カメ	ぴよんぴよん ウサギ	ゴムまき車	ヨットカー	ふくろ ロケット	ロケット ポーン	ロープウエ ー
-------------	------------	---------------	-------	-------	-------------	-------------	------------

- ・もっと作りたい
- ・もっと上手に作りたい
- ・折り紙で飾りたい
- ・色をつけたい

- ・ずるい子がいた
- ・遊び方を決めようよ
- ・一緒に遊ぼう
- ・楽しいね

- ・どうやって作るの
- ・一緒に作ろう

- ・遊ぶ会を開きたい

振り返りカードをもとに、児童の考えを把握し、次時に生かすようにしていく。

みんなで遊ぶためには、大会のようなものを開催させる必要があることを知らせる。

話し合うことで、「おもちゃ大会」が具現化することを意識させる。

うごくおもちゃ大会を開こうよ① (本時)

☆グループの必要性

- ・チームに分かれる
- ・お店屋さんみたいにすれば
- ・〇〇コーナー
- ・おもちゃの数を増やす

☆遊びの場の必要性

- ・レース場を作る
- ・スタートやゴールも必要
- ・まどを作る
- ・審判

☆ルールの必要性

- ・ルールを決める
- ・勝った人には賞品をあげる

個々の関わりから、グループ活動へとつなげ、さらに深く関われるようにしていく。

うごくおもちゃ大会の準備をしよう②

パッチン ガエル	とことこ カメ	ぴよんぴよん ウサギ	ゴムまき車	ヨットカー	ふくろ ロケット	ロケット ポーン	糸でのぼる 〇〇
・みんなで遊べるように、たくさん作ろうよ	・レース場を作ろう ・ゴールに旗を置こう	・どのくらい跳んだか、分かるようにしよう	・スタート位置を決めよう ・囲いがないと曲がっちゃう	・ゴールに入ったら勝ちだよ ・風の送り方は自由になろう	・人に向けちゃだめだよ ・距離を測ろう	・的を作ろう ・大きい的がいいね	・もっとたこ糸を長くすると競争しやすいね

うごくおもちゃ大会・・・みんなで遊ぼう②

成功感・充実感が持てるよう支援する。

- ・みんなで遊んだら楽しかったね
- ・友達っていいね
- ・1年生を呼んで遊ばせてあげようよ

- ・ルールを作っておいてよかったよ
- ・負けてばかりだったけど楽しかった
- ・他のクラスとも遊びたいな

うごくおもちゃ大会・・・1年生と遊ぼう③

1年生との関わりの中で、自分たちの成長にも気づかせたい。

6 本時について

(1) 本時目標

「うごくおもちゃ大会」を開くために、どうすればよいかを話し合うことで、いろいろな準備が必要なことに気づく。

(2) 本時展開

学 習 活 動	主な支援・留意点【評価】
めあて 「うごくおもちゃ大会」を開くために、どうしたらよいか考えよう。 ○自分の考えをもう一度確認する。 ○隣同士、意見を交流する。 ○全体場で発表する。 ☆グループの必要性 ・チームに分かれる ・お店屋さんみたいにすればよい ・〇〇コーナーを作る ・みんなで遊ぶためにおもちゃの数を増やす ☆遊びの場の必要性 ・レース場を作る ・スタートやゴールも必要 ・まどを作る ・審判がいた方がよい ☆ルールの必要性 ・やり方のルールを決める ・速くゴールしたら勝ちにする ・勝った人には賞品をあげる ○振り返りをする。 ○今日の感想・気づいたことを発表する。 ○次の時間に、やることを確認する。	○今日のめあてを確認する。 ○全体で話し合う前に、ペア交流をさせることで、話すことに慣れるようにし、自分の考えや意見に自信をもてるようにする。 ○見やすい板書を心がける。 ○クラスの話し合いを意識し、みんなの方を向いて、話すように声かけをする。 ○「なるほど」「同じ」「違う」を意識して、聴くよう声かけをする。 ○進んで発言できない児童には意図的指名を行う。 ○大きく3つのまとまりになるよう、まとめていく。 ◇うごくおもちゃ大会を開くために、自分の考えや意見を発言している。【関】 ◇おもちゃ大会を開くために、いろいろな準備が必要であることに気づく。【思】

7 実践を終えて

《単元の流れ》

単元のスタートは、教師の作った動くおもちゃで充分遊ばせることから始まった。もちろん、1人に一個ずつ以上のおもちゃが行き渡る数を準備した。遊ぶ時間を多くとることで、おもちゃを作りたいという興味を持ち、おもちゃの動く仕組みや工夫にも気づくはずと考えてのことである。予想通り、児童は「もっと遊びたい」「自分のおもちゃを作りたい」と願った。それから、話し合いは始まり、児童の考えや思いを受け止めての単元となった。そして、「うごくおもちゃ大会を開こう」に向けて、学習を進めていくことになった。しかし、「1年生を招待しよう」の発想だけが出てこなかった。悩みつつも私の方から投げかけることはしなかった。結局、自分たちが動くおもちゃで充分堪能してから、「1年生も呼んで遊ばせてあげよう」となり、すみやかに準備を進め、行動を起こすことができた。そこには「おもちゃ大会」を自分たちで開催してきた、確かに成長した児童の姿があった。

《成果と課題》

座席表を大いに活用した単元と言える。児童が毎時間書いた振り返りカードには、児童の考えや思いをもっと引き出せるよう、共感や問いかけを朱書きした。中には、返事を書いてくれる児童もいてうれしかった。毎時間の児童の考えや思いを座席表にメモし続けた。よい感想や友達との関わり合う姿が見られた時は、みんなの書くお手本となるように、次時に紹介していった。はじめは、感想や次の時間にやりたいことが分からず書けなかった児童が、おもちゃについての新しい気づきや友達と関わっている様子を書けるようになった。目的意識を持った言動も見られるようになった。また、「みんなでおもちゃ大会を開こう」という願いが強まっているのを感じた。

本時では「互いの意見を聴き合い、いろいろな準備が必要であることに気づくことをひびき合う姿としたい」とした。予想通り、多くの意見が出され、「ああ、なるほど」という思いは持てたはずである。「聴く」「話す」の指導の成果は確実に出てきていると思った。また、「みんなで」を意識したクラスづくりもできつつあると感じた。しかし、児童はいろいろな意見を持って話し合いに参加している。うっかりすると、発表会に陥りやすい。そこで、本時を振り返ると、「お店屋さん」「〇〇コーナー」「競技大会」といったキーワードが出た時こそ、いったん立ち止まり、その点について「どうしようか」と投げかけるべきだったと思った。それが、本時の中の「子どもの切実な問題」になるべきものだったのだ。共通のはっきりとした土台を持つことで、より切実さが増し、気づくことも多く、さらにひびき合う姿が見られたはずである。実際、次時では、本時で出された意見を一つずつ話し合っていくことで、具体的なことがらがしっかり決まっていたのである。

本時だけにとどまらず、教師がよしとしていた「切実な問題」も、教師の出所によって、いくらでも変えてく姿勢を持って学習に臨まなくてはいけない。しかし、出過ぎてもいけない。児童の思いや願いを受け止めつつ、教師が出て行くタイミングを見計らっていく技量を身につけてくことを今後の課題としていきたい。